全佛婦

No.123
2016年夏号
7月10日発行

公益社団法人
全日本仏教婦人連盟

全佛婦123号

平成28年7月10日　**発行日**
広報委員　**編集人**
末廣久美　**発行人**
合同会社まに　**デザイン**

発行所
公益社団法人　全日本仏教婦人連盟
〒151-0051
東京都渋谷区千駄ヶ谷
4-5-10-205

03-5772-0677　**電話**
http://jbwf.jp//　**URL**
info@jbwf.jp　**MAIL**

本多良之師　**表紙画**

巻頭言

人類の誓い

大本山善光寺大本願法主
公益社団法人全日本仏教婦人連盟
前名誉会長
鷹司誓玉台下

私がはじめてインド仏蹟参拝旅行に行かせて頂いたのはもう随分以前昭和六十年一月の事で、当時大本山光明寺御法主でいられた故藤吉慈海台下のおさそいによる小団体で参りました。藤吉台下は私が尼僧としての第一歩の学行を修(おさ)めはじめた尼衆学校の講師でもあり、禅と浄土宗学の双修、南方仏教の体験者でもあって浄土宗宗学研究所主任、花園大学名誉教授、禅文化研究所などの教育機関で指導していられ、中でも一番に体験実践研究につとめられ、特に故久松眞一（抱石）先生に私淑(ししゅく)して座禅の実践につとめていられました。その

故か仏蹟旅行の参加者も各宗の方々との混成メンバーと申しましょうか、それぞれの宗の方々の考え方うけとり方など色々とお教え頂く所が多く実践的勉強をさせて頂きました。殊に久松先生門下方の学道道場でまとめられた「人類の誓い」は〝平易な分りやすい現代文にまとめられており、通仏教思想によるお経のようなものです〟と仰言られ、私共は八大仏蹟の各所にお詣りするたびにパーリ語の三帰依文と共に必ず一同でその人類の誓いを唱和致しました。御承知の方も多いとは存じますが一応ここに採録させて頂きます。

「人類の誓い」

私たちはよく落ちついて本当の自己に目ざめ憐(あわ)れみ深い心をもった人間となり、各自の使命に従ってそのもちまえを生かし、他人や社会の悩みとその源を探り歴史の進むべき正しい方向を見きわめ、人種国家貧富の分なく皆同胞として手を取りあい、誓って人類解放の悲願をなしとげ、真実にして幸福なる世界を建設しましょう。

との文章で各宗に共通する理想でありま す。その内容深い印象は30余年もたった現在もなお忘れられずに居ります。言うは易く実行は中々むつかしいと思いますが近日中に訪日されるG7の世界の首脳方にも、ことには広島を訪れられる米国のオバマ大統領などにも何とかしてこのメッセージを知って頂きたいと思って、思い出すままに一文を収録してみました。

合　掌

ありがとうございました

鷹司誓玉台下は、平成二十八年三月三十一日をもって名誉会長を退任されました
ご退任にあたり――感謝の意を込めて…

鷹司誓玉台下はこのような御方

▼私は、父鷹司信敬、母敦子の長女として昭和四年、東京で生まれました。俗名は榮子（しげこ）といいます。

▼すでに両親はなくなっておりますが、父は、明治天皇の侍従長を務めた旧公爵鷹司熙通の四男で、私が小さいころは宮内省に勤務しておりました。母は、駿河沼津の水野家の出身で、祖父の水野忠亮は明治二年の廃藩置県で旧子爵に列せられております。

▼平日は大阪市立大学の助手のお仕事、週末は自分勝手に有職故実の研究を進めたり、慶応大学の通信教育でも学ぶという生活が善光寺入山まで続くことになります。

▼当時いろいろ手を出していた中でも特に深入りと申しますか、成果を形にできたのは、後に人間国宝になられた深見重助氏の「唐組平緒（からくみひらお）」の技術記録作成です。

▼「唐組平緒」というのは、簡単に申しますと組紐の一種ですね。「唐組」というのは、もともとは唐の国の技法という意味でしょうが、この場合は古い時代に大陸から伝来したというほどの意味でしょう。中国ではこの技法はすでに途絶えていて、日本でも、深見家という有職糸組師の家系だけがその技術を伝えるだけになっておりました。「平緒」というのは、平安期以降、朝廷のお公家さん方が「束帯」と呼ばれる正装をする時に、太刀を腰に下げるのに用いた飾り帯のことです。平緒が形状や機能、唐組は組織についての名称でして、何種類かある平緒の組み方の中で、一番正統的なものが唐組という事になります。

▼善光寺入山は昭和30年の3月26日です。

▼翌日の得度式から、俗名の榮子は捨て、「誓玉」になりました。法号は大宮上人が付けて下さったものです。大本願では昔から、住職となるべき法嗣には、正確に交互というわけではありませんが、「誓」または「智」が付くという伝統がございます。智栄上人、智光上人と「智」が続いたから、今度は「誓」にされたことと、大宮上人が絵をお描きになる時にお使いだった玉瑛という号から「玉」をいただいたのです。

▼「上人」という称号は元来、修行を積んで学問にも人格にも優れた高僧に対して、弟子や信者側からお呼びする尊称です。ところが江戸時代になりますと、尼僧寺院の中で三ヵ寺のみ、代々自ら上人を名乗ることができ、年齢や僧位僧階にかかわりなく常に紫衣を着用してよいという「上人号・常紫衣」のお許しを天皇からいただいたお寺が出てまいりました。伊勢の慶光院、熱田の誓願寺、そして善光寺大本願です。この三つの尼僧寺の住職が「日本三上人」と総称されるようになりました。

鷹司誓玉台下
『流れのままに』
（信濃毎日新聞社）より

◆●◆

鷹司誓玉台下とご縁を戴けましたことを誇りに思います。

大会にご臨席をたまわり、その時に戴いたご垂示です

【第45回大会ご垂示】

それぞれ一人一人が、わが身の生命の尊さを大切にすると共に、全ての人類の幸せ、生命の重さ、尊さというものを自覚いたしまして、共に何とか明るい世の中を築き上げて参りたいと存じます。

当婦人連盟におかれましては、昭和56年以降、仏教精神に基づき仏教発生の地でありますインドブダガヤの日本寺に医療施設光明施療院を設置されましたり又、一昨年の阪神大震災の救援あるいは亡くなられました犠牲者の冥福を祈る供養塔の建立をされ、その他さまざまな社会福祉面にもご活躍をしてこられました、誠にありがたいことと存じます。

◆●◆

【第47回大会ご垂示】

一條智光上人への追悼法要の後、世界各地の様々な対立や紛争が繰りかえされ、難民や孤児の方々の苦しみも後を絶たない頃を憂え二十一世紀こそ、皆様方の総力を合わせて何とかすべての人々が安心して暮らせる良い世の中に、平和な世界が現状致しますようにと祈られました。そして一條さまのご功績をたたえられ、私たち連盟とともにハワイの真珠湾戦没者慰霊法要、或いはインドブダガヤにおける光明施療院の設置に関してなど幾度かの海外旅行で皆様方と苦楽を共にされたことなどお話されました。

一條上人のご辞世の句をあげられ

「しばらくは半座をあけて待ちたまえ　やがてわが身も往きてまみえん」

反歌として

「しばらくは半座をあけて待ちたまえ　いつか我が身も往きてまみえん」

と詠われました。

◆●◆

【第48回大会ご垂示】

……9月11日、米国に同時多発テロが行われて以来、報復攻撃であるとか、或いは近頃では炭疽菌感染であるとか様々、物騒な情報が飛び交いましてこの離れ小島である日本まで何となく緊張感、恐怖感が漂っているような状況でございます。国家とか、民族、宗教、その他、もろもろの事に拘りを持ちまして自分達こそ善であり、正義であり、相対するものはすべて悪であり敵であるというような偏りをもって争いを重ねてゆくのは、誠に愚かなことと存じます。

……特に社会弱者である老人、女性、子供さんたちが、本当に着の身着のままで砂漠に逃れていっていられ、日々、難民が増加している現状は誠に悲惨でございます。

→大会で尼僧様たちとご詠歌を

◆●◆

【第49回大会ご垂示】

最近では、特に国内の子どもさんたちに対する配慮も必要ではないかとおもっております。いわゆる非行の方、あるいはイジメや、ついには暴力

行為に走るような子供さんたちもたくさんいられます。その方たちに対する精神的なケアを、私ども大人たちは日々心してできる限りの努力をしていかねばなりません。

◆◆◆

【第50回大会ご垂示】

現在、社会の情勢を見ますと、国の内外をとわず、あるいは個人や団体を問わず、様々な暗い悲しい報道がなされております。また国と国同士、民族同士、様々な争いごとも後をたちません。それらの根本を考えますと、それぞれがみんな、我こそが正しい、正義である、善であるという自己中心的な考えに立ち、現在では「ジコチュー」という言葉もあるそうでございますが、そのジコチューのために、悪は他人であると相対立する思いをいだきまして差別観にかたより、その結果さまざまな争いや悩みが起こっているようでございます。

◆◆◆

【第52回大会ご垂示】

今年は殊に台風、豪雨、あるいは一昨日の新潟中越地方の地震などによりまして、各地が大きな被害を受け、被災者の方々本当に困窮したご生活をしていらっしゃいます。それらの方々に一時も早く救援の手が差しのべられ皆様おちついて暮らせる世の中がきますように。

インド視察

平成20年11月11日よりインドのニューデリーにて、善光寺上人展が開催され、鷹司誓玉台下が信濃十全寺ご住職の袖山榮眞上人を団長として４０名ほどのご随行とともにご出席されました。現地では多くの方が宝物の鑑賞に来場し、日印の友好に多大な貢献を果たされたとお聞きしています。

翌12日に、一條智光前名誉会長が設立時に並々ならぬお力を尽くされた、光明施療院の視察をなさりたいという台下のたってのご希望により、ブダガヤの印度山日本寺へお迎えをいたしました。インドはとても広く、ニューデリーからブダガヤまで飛行機からバスに乗り継ぎ、待ち時間を含めておよそ10時間のハードな行程をおしてのご訪問です。

お着きになって直ぐに、貧しい病人で溢れる狭い治療室にご案内し、医師や看護師が休む間もなく治療している様子や、設備の不足、ストックの少ない治療薬等の状況をみていただきました。遠方から歩いてくる病人も数多く、一日に２００人以上の患者が訪れることや、病気予防や衛生の啓蒙が困難なことなどの説明をし、続いてやはり無料で幼児教育を行っている菩提樹学園にご案内しました。学園では歓迎会が催され、園児たちの歌、踊り、楽器演奏などが披露され、幼い子供たちの一所懸命さと愛らしさに微笑みと拍手のひと時をお楽しみいただきました。

（「全佛婦」98号より）

おもいで

顧問　林　惠智子

全日本仏教婦人連盟第45回大会が平成13年10月16日、一條智光御上人、鷹司誓玉御上人始め多くのご来賓のご臨席のもと、お台場のホテル日航東京で開催されたのは何年前になるのだろうと、改めて思い出しております。失礼のないようにお迎えしなければと心を痛めたことは、今でも忘れることができません。ホテルのスタッフの方々に対し「あなた方にとっては、普通のお客様かもしれませんが、仏教界にとっては陛下をお迎えするのと同じですから、どうぞお間違えの無いように」と、お願いしたこと等々思いだし、時の流れの速さに驚きを感じます。

その時残された一條御上人の「変わりゆく世の中のために仏教精神…」のお言葉を胸に、前島田喜久子理事長と一緒に13年3月、鷹司御上人に名誉会長ご就任のお願いに伺いました。色々な団体の役職、その他ご聖務のお忙しいところ、快くお引き受け頂きましたことも、忘れられない思い出の一つとなっております。

当連盟は設立当初より全日本仏教尼僧法団の総裁であった大宮智栄御上人を副会長にお迎えし、尼僧法団のご協力のもと活動を続けてまいりました。その後、一條御上人、鷹司御上人を名誉会長にお迎えできましたことは、会員一同はもとより当連盟にとりまして１年１年の大きな活動の支えとなっております。

大会にお出ましの折には、常々現代社会の様々な問題に心を痛められた御垂示を拝聴致し、会員一同当連盟の基本でもある仏教精神のもとに、改めて社会福祉に貢献できる大切さを知らされる思いでございました。また、参加者、会員等への心配りを頂き感謝しながら他の人への思いやることの大切さを気付かされました。

時には、鷹司御上人には大変失礼とは存じましたが、当連盟の困難な問題が起きますと、前島田理事長とともにお忙しいところお訪ね致し、お知恵を拝借致しました事等々思い出は尽きません。

三代に亙り、副会長、名誉会長等の重責をお引き受け頂き、全日本仏教婦人連盟はもとより、私にとりましてもこの上ない幸せでございました。心より御礼申し上げますとともにこれからもよろしくお願い申し上げます。

合　掌

【安田暎胤師】昭和13年岐阜市生まれ。昭和25年12歳で出家し、薬師寺に入山。橋本凝胤師の薫陶を受ける。昭和37年龍谷大学大学院修士課程修了。昭和38年宗教者平和使節団員としてローマ法王との謁見を始めヨーロッパ各地の宗教者と懇談。昭和39年名古屋大学学術調査隊員としてアフガニスタンを踏査。昭和42年薬師寺執事長就任。平成10年に薬師寺副住職、平成15年、薬師寺管主となり、現在は薬師寺長老。公益財団法人国際仏教興隆協会理事長。

聞 mon

詫びるという行為で、罪を犯した人間の心は救われる

殺人と強盗の罪で死刑判決を受けたある囚人の話です。

昭和9年、満州に生まれた彼は、戦後父母とともに日本にひきあげてきましたが、母は疲労から結核にかかり、まもなく死去。本人も病弱で結核やカリエスにかかり7年間ギブスをつける生活が続きました。

家は貧しく、学校の成績は最下位。幼少のころから多くの人から、病気や貧困、学力の低さなどを理由に差別され、蔑まれ、ひどい仕打ちを受けたのです。貧しさと飢えから、彼は非行や犯罪に手を染め、少年院と刑務所暮らしも経験しました。

そして昭和34年の雨の日の夜、彼は飢えに耐えかねてある農家に押し入り、農家の主人に重傷を負わせ、妻を殺害し、2千円を奪う強盗殺人事件を引き起こしたので す。彼は死刑囚となりました。

一審での死刑判決後、自分の人生を振り返った彼は、人生でただ一度、自分をほめてくれた先生を思い出します。

万年最下位の成績だった彼ですが、中学校の美術の時間、先生に「お前は絵は下手だが、構図は上手だ」

といってもらえたのです。彼はその先生に拘置所から手紙を書きました。するとすぐに先生から、驚きと情と厚意のある返事が届きました。そこには彼の手紙に歌心を感じた奥さんから、深い憐憫（れんびん）を綴った手紙と短歌の本が同封されていたのです。

これをきっかけに短歌を詠み始めた彼は、新聞に短歌の投稿を始め、入選を果たします。その後も入選を繰り返した彼は、死刑囚歌人として、その存在が広く知れ渡ることとなりました。

先生からの手紙は、彼が短歌を作り始めるきっかけを与えてくれたのと同時に、彼が改心する転機ともなりました。自分の不遇を嘆き、世の中を恨み、罪の責任を自分の不幸な生い立ちに転嫁して自暴自棄になっていた彼に、罪を自分のものとして受け止め、反省と被害者への深い謝罪をする心を芽生えさせたのです。獄中でキリスト教の信仰を得ることもできました。

彼の短歌はとても澄んでいて、生きていることのありがたさや、自分の罪に対する反省の気持ち、遺族への謝罪、周囲の人への感謝の気持ちなどが詠み込まれています。

そして死刑執行の前夜に書いた被害者への手紙で彼はこのように語っています。

「処刑を受けることになり、ここに深く罪をお詫びいたします。私は詫びても詫びても足りず、ひたすら悔いを深めるのみでございます。死によっていくらかでもお心の癒されますことをお願い申しあげます。申し訳ないことでありました。ここに記しお詫びの言葉に代えます。皆様のご幸福をお祈りいたします」

繰り返し心から詫びて犯した罪を悔いた後、自分に課せられた極刑を静かに受け入れ、自分の処刑が被害者の遺族の心を少しでも癒せたら、と願う。

彼は恩師の妻によって短歌と出合ったことで、命の尊さを学んだと同時に、心から罪を悔い、詫びることで自分自身の心も救われることを知りました。

彼の歌にはそれが如実に表れていて、その心が人を揺り動かすのです。

彼の名は島秋人。彼の処刑後、歌集『遺愛集』が出版されました。

詫びることは、相手の心を癒すだけでなく、自分の心をも救うのです。

安田暎胤
『生きる幸せに気づく五つの心』
（主婦と生活社刊）より

活動

第4回 全日本仏教婦人連盟総会

6月16日（木）午前11時より台東区西浅草の浄土真宗東本願寺派本山東本願寺様において、第4回総会が開催されました。

はじめに当寺の城総務部長御導師のもと、本堂にて厳かに勤行が執り行われました。

場所を慈光殿に移し、昨年9月に就任した当連盟小棹事務局長の紹介および篠田副理事長の挨拶ののち、東本願寺大谷光見御法主より御法話をいただきました。

御法主は、蓮如上人の「後生の一大事」というお言葉が大切であるとされ、日ごろから自分の死を見つめて死に対する心の準備をすること、常に仏様のことを心にかけて自らを悔い改めて生きることの大切さをお話し下さいました。

御法話のあとには、本多常務理事のご子息・良広師が若い方々が仏教に親しむ機会が増えることを願って作詞・作曲された仏教賛歌を聴かせていただきました。

しばし和やかに昼食と歓談を楽しんだのち、会員37名の出席、137通の委任状提出により本総会の成立が宣言されました。

末廣理事長の挨拶では、4月の熊本地震に際し多くの寄付が集まったこと、また今後予定されている、特に今年第100回目をむかえる文化講座などの活動への協力を呼びかけました。

議長・議事録署名人の選出に続き、桶屋理事より27年度事業報告、小棹事務局長より決算報告、木村監事より監査報告があり、裁決が行われ承認されました。ついで、日比野理事より28年度事業計画、事務局より予算案が提出され、第4回総会は滞りなく閉会いたしました。

女性の声 Voice

中外日報「女性の声」に昨年の10月から当連盟会長をはじめとして会員の方々が、女性として日ごろ考えたり感じていることを寄稿いたしております。何度かに分けて本誌に掲載いたします。

全日本仏教婦人連盟会長
青蓮院門跡門主夫人
東伏見具子

婦人の立場から家庭や地域社会に仏教精神を広め、国内外の福祉向上に寄与することを目的に全日本仏教婦人連盟が創立されて今年で62年目となりました。

このたび「美しい地球を子ども達に残そう」と環境委員会を立ち上げました。女性が家事で使うことも多い身近な「水」の問題から考えています。

日本では水があるのは、当たり前。しかし水不足の国での一人分の1日使う使用量が、1回のトイレで流されているのです。人類が利用できる水は、地球上の水の0．01%にすぎません。温暖化などによる水不足は近い将来必ず訪れます。

全国にいる会員が一人ずつでも「水を大切に」と思うようになれば、家庭や地域に伝わり大きな変化になるでしょう。そのための啓蒙をささやかながら始めました。委員会で専門家を招いて勉強会を行うほか、社会を華やかに明るくするための「花の種運動」で配る種の袋に今度から水を大切にするメッセージを添え、内外に発信しています。水の出しっぱなしをしないなど、できる事から始めましょう。

全日本仏教婦人連盟理事
天台宗薬王寺寺庭婦人
湯浅正江

「雑草という植物はないのです。」昭和天皇の有名なお言葉だ。私たちは知らない草を一括りに雑草と呼んでしまう。

それでも少しずつ学んだが、どのように名を知るに至ったか。それを花友達はご近所の方、と話したが、共通して挙がったのは自分で調べたのではなく誰かから教わったということだ。

「この花は上から見ると赤いが、裏は白い。紅白水引のようだから〝みずひき〟。その時の陽射し、空気感、教えてくれた人の仕草まで、一緒に思い出されるから不思議だ。

人との関わりは現代のあらゆる場面で鍵のようだ。境内の小さな文庫で毎月開く「お話会」がある。幼稚園、小学校低学年の子どもたちと関わるチャンスだが、「見たことあるけど名前はなあ〜に」と題して雑草の名を紹介している。ネーミングに意外な魅力があるようで、子どもたちの間でなぜか「すずめのかたびらおに」という鬼ごっこが流行ったことも……。

私も境内の草取り、頑張らなくては。

全日本仏教婦人連盟理事
念法眞教朝霞念法寺副住職
桶屋良法

念法眞教の燈主様は女性で、住職も女性の方が多くおります。開祖小倉霊現様は女性の使命について多くの教えを説かれ、中でも子供を産み育てることは重要な使命で、家庭が治まれば世の中も治まると強調されました。

最近は、社会に出て働くことこそが女性の地位向上をもたらすかのように言われ、違和感を覚えるのは私だけでしょうか。日本は、女性の地位が低く、家庭を守る生き方は間違っているかのような声が散見されるのは寂しい限りです。

子供を産むことは、神仏から女性だけに与えられた神聖な役割です。母親はどれほど疲れていても我が子にお乳を飲ませます。それまで大きな声で泣いていた赤ちゃんがお乳を一生懸命に飲む様子などを見ると、「育児は尊い」としみじみ思います。

家庭を守り、子を育てることに、女性はもっと誇りを持っていただきたいです。

Report of Culture lecture

文化講座報告

知識や教養だけではなく、実のある生き方を教示された“仏さまの智慧”を学ぶことを目指し、様々なジャンルの講師の方を招いて東京谷中天王寺で開催している文化講座。第97回から第99回までの講座のご報告をいたします

第97回文化講座

朗読を通して育む豊な想像力

4月13日（水）午前11時～
【講師】長谷川直子先生

関 香代子

日頃やってみたかった読み聞かせのノウハウを教えていただこうと参加させていただきました。「読み聞かせの効果」は、基本的にまず感じることの大切さ、そしてさらにそれをふくらませていける能力、想像力を育みます。子供達の育成にとても大きな力を与えてくれます。読み手の姿勢が大変に大切である事が理解できました。

近所の子供達や孫など多くの子供達に本を読んであげる機会は沢山あり、それなりに様々な経験はしましたが、こんなに心を込めて読んでいたかなと今は反省しきりです。40年近く前に子供に読んで聞かせていた「さんこギツネ」という絵本は今でも心に深く残っています。「お母さん間違えたよ！」などと言われながら毎日毎日読み続けました。

今回の「もちもちの木」も近所の子供達の宿題をみてやっている折に、音読で何度も何度も読みました。視覚的にも美しい話でしたので、人の優しさ勇気と共に色鮮やかな状景が目に浮かびます。

出来る事ならこれからも多くの機会を得て今日教えていただいた事を大切にしながら読み聞かせをし、子供達との楽しい本の世界を広げて行きたいと思います。

良い勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

第98回文化講座

第1回 環境セミナー

環境にやさしい神仏の教え

5月18日（水）午後2時～
【講師】丸山弘子先生

5月18日、「環境にやさしい神仏のおしえ～京都環境セミナーを前に」の文化講座が谷中天王寺にて開催されました。

講師は着物姿がとても素敵な早稲田環境学研究所・早稲田環境塾の丸山弘子先生。

環境問題の本質は自然観・宗教観が大きく関与しており、日本では「神道」が深く人々の芯となって根付いています。「一木一草に至るまで神様が宿っているので、自然を汚してはならない」、「自然は神様」という宗教観です。

そして日本に「一切衆生　悉皆成仏」という「すべての人は、誰でも仏性、つまり仏になる素質を持っている」という思想が伝来して、それが神道の「自然は神様」という考えに合わさり、天台宗の「草木国土　悉皆成仏」となりました。「心を持たない存在である山、川、草木に至るまで自然に存在するものすべてに仏性があると考える」というものです。

貴船神社（神道）が水の神様を司っていることまた三井寺（仏教）が森林再生へ取り組んでいることなどは、今に始まったことではなく、いにしえより粛々と受け継がれている大切な自然環境問題です。

「環境はあなた自身です」と先生は訴えておられました。

あらためて日本に生まれ、日本の宗教感の中で育ち、日本の自然の恵みをいただいて生きているということに感謝をし、これから自然を大切にしていくには自分になにができるかを考えました。

6月に開催される『京都環境セミナー』が楽しみです。

第99回文化講座

第2回 環境セミナー

環境にやさしい神仏の教え

京都貴船神社参拝・大津三井寺参詣

6月22日（水）
【講師】丸山弘子先生

日比野郁皓

京都駅から満席の貸切バスで、早稲田大学環境塾講師、丸山弘子先生のお話を聞きながら60名の参加者たちは、京都洛北へと向かいました。市街をぬけ、30分程の後には整然と並ぶ杉の木立を分けた細い登り道となり、一行はきりりとした空気や爽やかな水の音の別世界へと誘われ、貴船に到着しました。

鴨川の水源の水と気を司る貴船神社の本殿に参詣し、高井和大宮司のお話を聞かせていただきました。日本人の自然に対する畏敬の気持ちは、神道仏教共通の自然観であり、とそれとは異なる西洋の自然観と対比された興味深いお話をいただきました。水の供給を司る神、雨、大地、樹木、水の循環と命のお話には平和的な快い空間で、時間を忘れて聞き入りました。最後にケニアの環境副大臣が「もったいない」を環境保護の合言葉にと提言されたことに同感され、自然への敬虔な祈りを表したいと語られました。

昼食は貴船川の川床「ひろや」で、会話を消すほどの水の流れの音に涼しさを感じながら鮎などのお料理を楽しみました。三井寺へ向かう約1時間のバスでの移動中、東伏見会長、岡野相談役をはじめとする参加者の方々から様々な感想が述べられ、楽しいひとときとなりました。

三井寺に到着すると、広大な境内の静謐さに圧倒されながら、弥勒仏を本尊とする国宝の本堂においては1300年の歴史のお話を聞き、国宝の素晴らしい客殿を見学させていただきました。宝物館においても重文の宝物を拝見し、講堂では福家俊彦三井寺執事長による「いま、ほんとうにたいせつなもの」と題したお話がありました。過去に日本が経済発展の全盛の頃、経済性や利便性を優先させた開発によって三井寺山中の自然循環が破壊されたというお話の後、現代においては自然保護のために、今までの価値観を転換した論証力が必須であると説明されました。

京都の自然循環の神秘性に浸りながら、未来の地球のため、子供たちのために環境保全に努力せねばと心新たにさせられた京都環境セミナーでした。心配された雨もほとんど降らず、本当に多くを学ばせて頂いた1日でした。

参加者の声

▼朗読は抑揚をつけるとすごく聞きやすく、感情が入って情景が浮かんで参ることを勉強させていただきました。
（88歳　女性）

▼心をこめて読むこと、それを聞かせていただく時間のあたたかなことを実感しました。
（42歳　女性）

History

文化講座100回の歴史

回	年月日	講師名（敬称略）	演題（内容）
1回	16年4月26日	正村 瑛明	お釈迦様の後ろ姿
2回	5月21日	名取 芳彦	ひっくりかえる
3回	6月25日	古宇田亮順	小さなパネルで大きな夢を
4回	9月17日	佐藤 雅彦	死の看取り ～仏教者のできること～
5回	10月22日	小峰 和子	写仏
6回	11月26日	杉谷 義純	忘れられた戒律の精神
7回	17年1月28日	村上 正行	話し方の極意 ～心のキャッチボール～
8回	2月25日	佐藤 晴輝	人生に三つの坂あり
9回	4月26日	岡村 隆二	日常生活における気の活用
10回	5月20日	星野 英紀	宗教は本当に戦争の原因か？
11回	6月17日	塩入 亮乗	日本文化と生活
12回	9月16日	富田富士也	報恩感謝
13回	10月21日	小峰 和子	写仏
14回	11月25日		写経会
15回	18年1月20日	齊藤 昭俊	仏教・道徳そして教育
16回	2月17日	神 仁	ひきこもる若者たちのこころ
17回	4月21日	末廣 照純	家庭の絆とは ～仏教の観点から考える～
18回	5月19日	佐藤 隆一	家庭の絆とは ～臨床心理学から考える～
19回	6月16日	吉澤 英子	子供にとって家庭とは・健全育成を願って
20回	9月15日	植木 雅俊	仏教の中の女性達
21回	10月20日	小峰 和子	写仏
22回	11月17日	野口 圭也	花の心と仏教
23回	19年1月19日	佐藤 達雄	家庭の中の仏教
24回	2月16日		写経会
25回	4月18日	原 豊壽	仏陀の言葉
26回	5月16日	末廣 照純	比叡山の回峰行 ～ビデオ鑑賞とお話～
27回	6月20日	青山 忠一	だらしないとふしだら ～言葉の意味と始まり～
28回	9月19日	諸橋 精光	般若心経絵本が出来るまで 実演 ～仏教童話の超大型紙芝居～
29回	10月17日	小峰 和子	写仏
30回	11月21日	宮澤 正順	いのち、元気
31回	20年1月23日	原 秀子	信仰の心と子供の育ち
32回	2月20日		写経会
33回	4月16日	高橋 史朗	親学のすすめ ～家族・地域の絆の再生～
34回	5月21日	高田都耶子	心のさんぽみち
35回	6月18日	藤波 洋香	心ゆたかに
36回	9月17日	大谷 哲夫	羅漢さんについて
37回	10月15日	小峰 和子	写仏
38回	11月19日	浦谷 兵剛	正しいお箸の持ち方
39回	21年1月21日	ペマ・ギャルポ	チベット・中国関係を取り巻く国際情勢
40回	2月17日		写経会
41回	4月15日	神 仁	ヨーガと仏教 ～その思想と実践～
42回	5月27日	清水谷孝尚	浅草寺参詣とご法話
43回	6月17日	北田 智昭	日本文化と雅楽について
44回	9月16日	八木 千暁	雅楽を遊ぶ ～音色を楽しみ響きにやすらぐ体感ワークショップ～
45回	10月21日	小峰 和子	写仏
46回	11月18日	安田 映胤	心の道しるべ
47回	22年1月21日	大工原弥太郎	働いて親を助けたい子たちとの４０年
48回	2月17日		写経会
49回	4月21日	篠原 鋭一	人生に定年はありません
50回	5月19日	保谷果菜子	金子みすずいのちへのまなざし
51回	6月9日	菅原 榮光	日光山輪王寺参詣とご法話
52回	9月8日	来馬 明規	タバコは国際的人権問題
53回	10月20日	小峰 和子	写仏
54回	11月17日	岡野 鄰子	現代に生きる仏の教え
55回	23年1月19日	萩野 映明	今を生きる
56回	2月23日		写経会
57回	4月20日	太田 久美	子供の心のＳＯＳを受けとめて
58回	5月19日	張堂 完俊	深大寺参詣とご法話・神代植物園散策
59回	6月8日	村井 雅清	東日本大震災から学ぶ
60回	9月14日	横山 光子	五説経ざさら語り
61回	10月31日～11月2日	長艸 敏明	山陰古寺めぐり研修
62回	11月16日	山田 俊和	刺繍が伝える仏様
63回	24年1月18日		平泉浄土について
64回	2月15日	大谷 哲夫	写経会
65回	4月18日	富田富士也	仏教説話について その一
66回	5月16日		子ども叱るな来た路じゃ、
67回	6月5日	塩入 秀知	年寄り笑うな往く路じゃ
68回	9月26日	大谷 哲夫	喜多院参詣とご法話・小江戸川越めぐり
69回	10月17日	大谷 哲夫	仏教説話について その二
70回	11月20日		仏教説話について その三
71回	25年1月16日	石井 敬基	日常生活の中に潜む病気のサイン
72回	2月20日		写経会
73回	4月17日	本多 良之	絵手紙を学ぶ体験実習
74回	5月22日	石井 敬基	膵臓の病気について
75回	6月19日	戸松 義晴	人生の旅じたく
76回	9月11日	浦井 正明	徳川慶喜について
77回	10月9日	四條 隆彦	和文化と現代マナーについて
78回	11月25日		京都妙法院門跡・青蓮院門跡参詣
79回	26年1月22日		写経会
80回	2月13日	八木 季生	修正会
81回	4月16日	金田 諦應	こころを聴く ～カフェ・デ・モンクの活動～
82回	5月21日	多田 孝文	法華経について
83回	6月18日		東日本仮設訪問及び高校訪問
84回	9月10日	生駒 基達	よろこびと感謝とうやまいの心
85回	10月15日		写経会
86回	11月5日	平幡 良雄	千葉県銚子満願寺・円福寺参詣
87回	27年1月21日		お抹茶の頂き方
88回	2月18日	西舘 好子	青年僧達と語らう ～天台宗～
89回	4月15日	町田 宗凰	子守唄に導かれて
90回	5月20日		ありがとう禅
91回	6月23日	山嵩 龍雲	寂光院・三千院門跡参詣
92回	9月16日	柴田龍太郎	彫ることは祈ること
93回	10月21日		知らないと怖い成年後見と高齢社会へのあわてないための備え
94回	11月18日		～マイナンバー制度のあらまし～
95回	28年1月20日		青年僧達と語らう ～浄土宗～
96回	2月8日	岡本 永司	写経会
97回	4月13日	長谷川直子	護国寺参詣と修正会法要・ご法話
98回	5月18日	丸山 弘子	朗読を通して育む豊かな想像力
99回	6月22日	丸山 弘子	第１回環境セミナー ～環境にやさしい神仏の教え～ 第２回環境セミナー ～環境にやさしい神仏の教え～
			京都貴船神社参拝・大津三井寺参詣

文化講座 第100回記念講演会

平成28年9月には、文化講座第100回目を迎えることから、「文化講座第100回記念講演会」を次のとおり開催する予定です。

多くの皆様がご参加くださいますようお願い申し上げます。

【日　時】　平成28年10月19日（水）
　　午後3時半
【場　所】　パレスホテル東京 2F「葵」
　　東京都千代田区丸の内1－1－1
【講　師】　ジャーナリスト　櫻井よし子 先生
【演　題】　「教育が拓く未来」
【チケット代】2,000円

第63回大会

引き続き同ホテルの「葵（西）」にて、午後5時半より開催いたします。
詳細につきましては後日ご案内いたします。

お寺と子供

子供たちの未来のために

境内や施設は開放されてお寺は、
子供たちの元気な声に息づき、穏やかな光に包まれています
子供たちのために！地域のために！
ありがとうございます

真言宗豊山派

金剛院

住職　野々部利弘

地域の子どもたちを見ていると、友人との横軸、先生や親との縦軸の他に「地域」という良い加減の斜軸が必要だと思ってます。私が子どものころは、駄菓子屋さんが、その斜軸で「心の居場所」でした。そんな家庭でもなく、学校でもない第3の居場所としての機能をお寺の中に作りたいといつも思っていました。

金剛院では、子どものプログラムを多く行っています。スーパーボウル作りなどのお寺でサイエンス、境内の庭を利用して葉っぱでビンゴなどのフィールドゲーム、子どもフリーマーケット等が行われています。

また、考える力を養う無量大成塾、親子が共に「生きる」ことを楽しみ、学びながら共に育ち合うための親子保育、弁護士さんによる子どもの人権に関する無料相談、なんらかの理由で十分な食事を取れない子どもたちに学習や食事を支援していく、夜の児童館、子ども食堂などは定期的に開催しています。

「夜の児童館」は毎週火曜日、夕方から21時、「子ども食堂」は毎月第2、第4木曜日、夕方から21時くらいまで行われています。一見同じような取り組みですが雰囲気は違います。

「夜の児童館」は家庭的な感じで、昔のように3世代が同居している15人規模の大家族のような感じです。子ども一人一人の存在を大切にしていくと、成長していく姿がとても伝わり良くわかります。

一方「子ども食堂」は、いろいろな立場の方々が集まり、1回に100食くらいの食事を作るために質感が違い華やかです。大勢で食べると、こんなにも子どもたちの表情が、豊かに変わるんだと思うくらいです。

区別の多い世の中で、誰でも気軽に訪れることができますし、ボランティアの方々は、学生さんから社会人、シニアの方までいて、幅広い世代が自然な形の中で交流が生まれ、人と人がつながる瞬間が感じられます。

私はこれからのお寺は、ますます大切になると感じています。情報化時代は、生活を便利にする反面、めまぐるしい変化は逆に不安を生み出します。その分だけ人々は、「安定」したものを求めるようになっていきます。そのときに、長い時間をかけて作りあげてきた、お寺の聖なる存在に私たちの「原点」を発見することでしょう。

お寺は、先祖を弔い、子どもの成長を願う「祈り」の場でありました。それと同時に寺小屋は、地域の子どもたちが「学び」合うための学校であり、定期的に市が立ち、催しや祭が行われて子どもの「楽しみ」の場、さらには、心身を整える「癒やし」の場所で、地域の問題を解決する裁判所でもありました。

そうした複合的な結びつくハブ機能を持つことで「点」と「点」が「線」となり「面」になっていきます。それが親子の心に安心をもたらし、未来へと歩んでいくための心強い安全と安心の「お寺セーフティーネット」になっていくのではと考えています。

天台宗

藥王寺

当連盟理事　湯浅正江

お寺の境内の隅に小さな文庫がある。同じ境内に学校法人立の幼稚園があり、この文庫はご近所の図書室機能と、幼稚園の送りお迎えの日よけ、雨よけ機能、地域の小学生や降園後の親子いっしょの本選び、というように訪れてくれる人の数には恵まれている。

ここの蔵書は偏っているかもしれないが、「買うまでもない教育図書」と題して棚には『気になっているけれど』の新刊本を置くようにしたり、自分の好みの本を置く場所であったりもする。幼稚園児用、小学生、中学生用は、自分の東京子ども図書館での松岡享子先生のストーリーテーラー養成の２年間に、幼児、小学生、中学生の時期に適したものの大事さを学び、かなり意識して導入していった。

このような文庫の原点は、今思えば、自分の幼児期、近くのりっぱな仏教図書館とそこに居られた大人の方との出会いにあったようです。仏教図書館の貴重な仏教の書物の収蔵量は大変なもので、重厚な木の建物や黒く光っている本の棚や床、背よりも高いカードケース、研究目的の大人の方が時々みえる静かな場所でした。館内で働く方は小さい子にも声をかけてくださり、「あんたにぴったりの本が入ったよ」といって絵本を読んでくれる館長さん（お坊様）がおられた。絵本の途中で涙になってしまわれた時もあり、その本はあまんきみこさんの「お月さんももいろ」でしたが、わたしには特別な思い出の一冊になりました。

文字離れ、活字離れといわれている現代、物語のおもしろさや読書の楽しさが伝わって行くには、周囲の大人の人の手を介することが不可欠ということは皇后様のIBBY御講演「橋をかける」からも強くうかがうことができるし、石井桃子さんの文庫や東京子ども図書館で幼少期をすごされた大人の方々（阿川佐和子さんご兄弟など）がそれを伝える活動をつづけておられる。

最近のスマートフォン・携帯機能は進化し続け、新聞や本、分厚い辞書や百科事典のように調べることも、音楽もカメラ、写真アルバムも、買い物、駅の切符も、何でも人と関わることなくこのスマホ一つで用が足りるようになってしまった。授乳中のおかあさんとあかちゃんの間にもスマホはしのび込んで来る。あかちゃんとおかあさんの視線が合うゆたかな時間が未来の子どもたちのためにあるように願って文庫でわらべ歌遊びを紹介したり、私の道案内をしてくださった成田山のお坊様のように“あなたにぴったりの本コンシェルジュ”めざして文庫での時間をすごしています。

真言宗智山派

南蔵院

住職　花木義明

南蔵院（東京都板橋区蓮沼町）では、地域の子供たちを集めて本堂に隣接した多目的ホール「福聚殿」において「南蔵院子ども会」を開設し子どもの成長を地域で支えていらっしゃることから、その取り組みの様子を取材させていただきました

取材者：小棹ふみ子、末廣綾

Q　「南蔵院子ども会」を始めるきっかけはどのようなことでしたか

A　昔はお寺にお年よりや子どもたちが集まり何時も賑やかでしたが、今はなかなか人が集まらなくなり地域でお寺の役わりが消えてしまっていますので、誰かがお寺を使ってもらいたいと考えていました。私が「月まいり」で一人暮らしのお年寄りを訪ねたときに、「一人で食事をするのは寂しくないですか」と尋ねると「寂しくありません、慣れました」と答えが返ってきたことから、地域のお年寄りに食事を楽しく食べてもらおうと「南蔵院ランチ倶楽部」を開設しました。次に、子どもたちにお寺を使ってもらいたい、地域の子どもたちのために出来る事はないかと、「ＮＰＯ法人健やかネットワーク」の佐々木令三氏の協力のもと「南蔵院子ども会」を昨年の６月に開設しました。

Q　始める際には、どのように広報をされたのですか

A　町会にお願いして、地元の小学校２校の全生徒に「チラシ」を配付していただきました。最初のうちは２～３人しか集まりませんでしたが徐々に増えていっております。

Q　現在はどのような形で活動されているのですか

A　最初は月１回で２～３人の子どもたちが集まっていましたので、私の妻がメニューや料理を作って提供していたのですが、今ではそれを見ていたお母さんたちが手伝ってくれています。現在はお母さんたちも含めて５０人位が集まっています。メニューは地元にある東京家政大学の栄養学科の学生さんが作って下さり、食材の買出し、調理はお母さんたちがやってくれています。調理は、４時から始まり食事は６時からホールでみんな一緒にいただき８時に解散します。

Q　たくさんの方がお手伝いされているのですね

A　お寺だけで頑張ろうと思ったらできないことも、お寺が場所とアイデアを提供して、健やかネットワークの佐々木さんのアドバイスとお母さんたちの協力のもと参加者と協力者が徐々に増えてきています。口コミですね。

主体は子どもたちで、やるのはお母さんたち。主催者が主導的に決めるのではなくお母さんたちに決めてもらっています。「ルールがないのがルール」です。そのほか、ピアノ演奏や読み聞かせなどのボランティアの方々の参加もあります。

Q　継続している秘訣はなんですか

A　「食の話」は後からついてきたことで、自分の判断で自由に参加できることが大事だと思っています。年齢制限もなにもありません。

チラシにはホールでできることは「しゅくだい、本をよむ、あそぶ、ごはんをたべる」と書いてありますが、子どもたちはホールを自由に走り回っています。子どもたちは、それがやりたいんです。現在の子どもたちは禁止されることに縛られていますから、ルールに縛られることなくやってもらっています。参加できる子ども、参加できるお母さんが自由に集まり自分のできることをやっているので続けられるのだと思います。

Q　参加されているお母さま方の反響はいかがですか

A　参加する日時、仕事の分担等に縛りがないのでお母さんたちも自由に参加して楽しんでやってくださっているようです。お母さんたちの自主性に任せています。

Q　子どもの貧困率が上昇しているという実感はおありですか

A　目に見えていませんが、本当に困っている人がいたらこの会のことを聞きつけて参加してくれれば良いと考えています。集まってくれるお年寄りや子どもたちはとても元気になったように感じますので、困っているお子さんがいれば、是非、参加してほしいと思っています。

Q　今後のテーマはおありですか

A　本当に困っている子や家に帰っても電気もつけないで真っ暗な部屋に一人でいる子どもたちの「居場所」をつくりたいと考えています。

本当に困っている人には、月２回では困るので、毎日あってほしい訳です。非日常的な開催ではなく、毎日日常的に開催できることが理想です。

Kaihotsu

子供たちの未来のために

環境シリーズ❸

開発から〝開発〟へ

～命の水を守るために～

「早稲田は慶応のライバルだ」とよく聞きますが、「早稲田は慶応の競争相手だ」とはあまり聞きません。英語のライバル〝rival〟は日常会話でよく使われます。そのライバルの語源はラテン語で「同じ川を利用する人」が原義で、そこから「同じ川を巡って争う者」を意味するようになったといわれます。それだけ水は生活に必要不可欠で、争いの種になったからでしょう。

筆者が中学生の頃、『日本人とユダヤ人』(註1)という比較文化論が一世を風靡しました。その中で、「日本人は安全と水はただで手に入ると思っている」というフレーズが印象的で今なお覚えています。しかし、２０１６年の現在、国際情勢の影響を受け、その日本でも安全は危ぶまれています。また、天災や気候変動で水の確保も楽観視できません。ましてや、地球的規模で考えれば、水不足は深刻です。

01 「ライバル」の語源は？

02 水を得るために森を育む

世界水フォーラムは１９９７年から3年に一度、世界の水関係者が一堂に会し、地球上の水問題の解決に向けて話し合う国際会議です。２００３年には第三回世界水フォーラムが京都、大阪、滋賀を結んで開催されました。その際に、京都の貴船神社の高井和大宮司は「水を神と崇めた日本人の心」と題して講演しました。

水は大地に生い茂る樹木が育む。だから、日本人の祖先は、この樹木を大切にしてきた。一方、日本は木の文化で、これまでにたくさんの木を切ってきたじゃないかと言われるかもしれない。しかし、昔の人はむやみに木を切らなかった。木を切るたびに、木の神にお供え物をして「一本戴きます」とお断りしてから木を切った。切った後にはそれに倍する木を植えて育ててきた。日本人は太古から植林の知恵を持っていた。(註2)

「一本戴きます」と神にお断りしてから、木を切るという習慣は他の国にあるでしょうか。日本では一木一草に至るまで神が宿っているという神道の自然観があるので、このような発想が生まれたのです。日本人にとって、水は神から賜った命の源であって、単なるH₂Oではありません。水素と酸素の化合物と分かっていても、人の力では作ることはできません。(註3) そして、その樹木こそ命の水をもたらし、洪水を防いでくれるので、人々は森を大切に育んできました。

03 「木の出家」を行うタイの僧侶

一方、タイでは産業化により森林の減少が進み、洪水や干ばつなどの自然災害が起こるようになった中で、「木の出家」を行って環境危機に立ち向かう僧侶が現れました。

北部タイにあるボーダラマ寺院の住職であるマナス・ナティーピッタク師は、人々に環境の大切さと伐採のもたらす危険性を教えるために、僧侶が身につける黄衣を木の幹に巻いて「木の出家」の儀式を行い、木を神聖化しました。その結果、敬虔な仏教徒の人々は僧侶の黄衣が巻き付いた木をあえて切ろうとせず、伐採を断念するようになったそうです。「出家」という重要な仏教儀式により、木を伐採すれば森林に守られた環境が破壊され、洪水や干ばつが引き起こされることの重要性を人々に喚起したのです。(註4)

このように自然および社会や人との共生のために、地域社会の内発的発展に寄与する僧侶を開発僧(かいほつそう)といいます。では、耳慣れぬ音の開発(かいほつ)とよく使う開発(かいはつ)では何が違うのでしょうか。

04 仏教用語の開発(かいほつ)

我々が一般に使う「開発(かいはつ)」という概念は通俗的には、「〇〇を開発する」という形で、他動詞とし

て用いられ、「上から、他律的に、人為的に」といったニュアンスを含むものとされます。すなわち開発とは、自然を切り開き資源を人間社会に役立てること、未開の土地や社会を切り開いて近代的なものにしていく、といった意味合いで用いられています。日本において、こうした開発概念は江戸時代の新田開発にはじまり、北海道開発など政府が上から事業を行う様相を指しています。（註5）

しかし、「開発」という言葉の起源をたどれば、実は日本においては元来仏教用語として用いられてきました。その仏教用語の「開発（かいほつ）」は、現在用いられている他動詞的意味の「開発（かいはつ）」とはまったくニュアンスが異なり、「内から、自律的に、自然に」という意味合いを持つ自動詞です。仏教においては、変わりゆくものにとらわれることなく、縁起する社会で慈悲を実践して潜在能力である仏性を開花させることこそ「開発（かいほつ）」なのです。（仏性開発（ぶっしょうかいほつ））（註6）

仏教に由来する「開発（かいほつ）」の概念は、一宗教を超えて、環境保全のあり方に対する方向性を示していると考えます。それは自然および社会や個人との共生のために、自ら目覚め、生きとし生けるものを慈しむ環境にやさしいアクションだからです。

タイの開発僧は知恵と慈悲をもって、自然と地域住民の共生のために、「木の出家」を通して自然保護に尽力しました。我々もこの内なる声に基づいて行動する「開発（かいほつ）」の担い手となるべきではないでしょうか

都会育ちのK君は、大学在学中いつもペットボトルを買っていました。ところが、就職して西新宿に通うようになると、入社三日目からこぎれいな水筒を買ってきて、通勤時に持参するようになりました。周りの先輩もペットボトルを買わないので、水筒の方がカッコいいと気づいたのか。何れにせよ、K君が自発的に気づいたささやかな心掛けです。次第にK君は水筒の中身にも気を配るようになり、水出し緑茶やさわやかなアールグレイティーを楽しんでいるようです。こんな些細な事でも「開発（かいほつ）」の知恵でクオリティ・オブ・ライフが充実するのです。

05 結び

日本人は水を神と崇め、植林の知恵で森を守ってきました。タイの開発僧も「木の出家」で森の環境破壊を防ぎました。どちらも宗教的側面から環境保全に一役買ったといえます。新入社員のK君も自ら水筒を使うことに目覚め、環境にやさしいアクションを起こしています。このように我々一人一人の意識改革が環境問題の解決につながっていくはずです。命の水を守るために、我々が「開発（かいほつ）」へ向かう心構えが大切なのではないでしょうか。

丸山弘子

早稲田環境学研究所・早稲田環境塾講師／早稲田大学大学院修了

京都貴船神社 御神木の桂

【註】

註1） イザヤ・ベンダサン『日本人とユダヤ人』、山本書店、1971年、14頁。
註2） 高井和大「水を神と崇めた日本人の心」、（第三回世界水フォーラムにおける講演要旨）、『早稲田環境塾―環境日本学を創設する―第5講座「神道・仏教に内在する自然・環境保護思想と近代行政制度」』、早稲田環境塾、2009年、134頁。
註3） 高井和大「神道に内在する環境保護思想」『京都環境学 宗教性とエコロジー』、藤原書店、2013年、109頁。
註4） 西川潤・野田真里『仏教・開発・NGO　タイ開発僧に学ぶ共生の智慧』、新評論、2001年、273～275頁。
註5） 同上書、18頁。
註6） 同上書、18頁。

里親運動

当連盟ではインドベナレスのDCVの６名とSRFの１名そして標高3500メートルのラダックの学校に通う３名を支援しております。

新しい里子３名の紹介をします。

それぞれ、お父さんやお母さんがいなかったり、両親ともいなかったりなど経済的にとても厳しく困難な状況に置かれている子供たちです。しかし、みな成績優秀で、農村や国の貧しい人々の役に立ちたいという夢を実現させるため、毎日勉強に励んでいます。

子供たちが継続して教育を受けることができるように、どうぞあたたかいご支援を宜しくお願いいたします。

ソニ・パテルちゃん

- 年齢：10歳（6年生）
- 親の職業：【父】ー
  【母】主婦／農家
- 将来の夢：教員
- 好きな科目：科学／ヒンディー語

アンキット・ゴゥプタくん

- 年齢：12歳（6年生）
- 親の職業：【父】ー
  【母】主婦／野菜売り
- 将来の夢：エンジニア
- 好きな科目：数学／英語

シャニデオ・パテルくん

- 年齢：10歳（6年生）
- 親の職業：【父】ー
  【母】ー
- 将来の夢：教員
- 好きな科目：ヒンディ語／歴史

熊本地震義援金の御礼

熊本地震への義援金のご協力をお願いいたしましたところ、早速に多くの皆様からご送金をいただきました。その義援金は5月30日現時点で**1,824,000**円になっております。連盟で日頃皆様からお預かりいたしております「心の募金」とあわせて**2,000,000**円を被災地の復旧・復興等の事業に役立てていただくことを目的に、熊本県に直接振込させていただきました。

早期に復旧復興を果たし、熊本の被災者の方々が日常の幸せを取り戻すことができますように、心よりお祈り申し上げます。またご協力をいただきました皆さまのご厚意に深く感謝いたします。

義援金協力者名（順不同、敬称略）

鈴木トヨ子	小川阿希美	棚橋弘子
正本乗光	木田正子	日光山輪王寺門跡
傳通院	髙山昭子	上野法忍
山口偉理子	本多昭子	野々山みね子
小峰立丸	小池弘三	無憂樹の会
小峰喜和子	岸道子	中野日演
河原時子	小林牧子	花岡眞理子
末廣照純	本多端子	土屋勇美子
白井八重子	柴田まさ子	平林宣子
岩脇孝子	関戸あけみ	米田陽子
松井百合子	安孫子虔悦	念法眞教
安井豊子	宮澤正順	満願寺
髙橋厚子	東漸院	泰書會
池上本門寺	望月みゆき	横割由佳
岩田叡子	小松美佐子	石上幸子
山口興順	清水則子	長岡道子
笠井淑子	飯田亘子	上保敏子
板垣和代	小林静子	坂井智宏
倉佳子	高神洋子	末廣久美
大堀カヨ	林房江	末廣綾
米山友子	望月裕子	髙﨑悦子
江森隆美	富田記代	山居享子
深大寺	逸見秀子	竹林寺
上原桂子	永崎亮安	荒畑静子
平和子	日野西光尊	総本山知恩院
齊藤昭俊	小林三葉子	村田寛子
大橋百合子	川村博子	西新井大師總持寺
小峰みな子	川名庸子	小棹ふみ子
木南鈴子	佐々木公子	海老名初江
樹谷晶子	篠田節子	金蔵寺
孤嶋東子	野口皆子	来馬和子
鈴木玲子	長尾節子	湯浅正江
妙法院門跡	川崎大師平間寺	佐藤幸子

Letter from a scholarship students

あおぞら奨学基金

当連盟では、東日本大震災で被災した高校生の授業料以外の必要な学習費用を支援しています。皆さまにご支援いただき、今年無事卒業を迎えることが出来た高校生達からお手紙が何通か届きましたので、一部紹介いたします。

石巻市立桜坂高等学校

私の高校生活は、三年間充実した日々でした。

入学当初は、他の中学校の人達と仲良くしていけるか、不安でいっぱいでしたが、学校生活に慣れるにつれ、友達とも少しずつ仲良くなり、今でもとても大切な友達がたくさんできました。また、商業科を希望して入ったものの、中学とは違う専門的な勉強についていけるのだろうかと不安も感じていました。　でも、わからない時には積極的に先生方に聞いたり、友達に教えてもらったりしたことで、三年間、学年で上位の成績が残せるようになりました。

学校行事の思い出はたくさんありますが、特に印象深いのは、二年生の時の修学旅行と三年生の時の体育祭です。

修学旅行では、USJと京都に行きました。USJでは、私達の行った時期はハリーポッターの新しいアトラクションが登場した時期で、実際行ってみたら、自分自身が映画の中に入ったような感覚を味わいました。その時のわくわくした感覚は今でもしっかりと覚えています。また、京都の街並みにとても感動しました。今まで見た事がないような景色でとても美しく昔にタイムスリップしたような感じがしました。

体育祭では、バスケットボールに出ることになり、体育祭当日まで、一緒に出る仲間達と市内の体育館を借りて練習をしました。そのおかげで、全校で優勝をすることができました。みんなで力を合わせて勝つことが出来て、とても良い思い出になりました。修学旅行、体育祭などの行事がある度に、友達との絆が深まっていったように思います。

高校三年間、たくさんの経験が出来、充実した生活が送れたのも、いつも応援してくださった貴法人の方々のおかげだと思っています。

四月からは大学に進学し、保育士の夢をつかむために頑張っていきます。

本当にありがとうございました！

仏婦NEWS抄

私たちの日々のあゆみ
2015年4月～6月

4月 April

1日 「沙羅の樹」5号発行・発送
第29回花まつり（大正大学キャンパス内）
8日 京都花まつり出席（ANAクラウンプラザホテル京都）
13日 第1回役員会（天王寺）
14日 第97回文化講座（公財）日本宗教連盟70周年記念式典出席（築地本願寺）
20日 大本山善光寺大本願訪問（長野）

5月 May

10日 監査会（事務局）
11日 天台座主森川宏映猊下傳燈相承披露の集い出席（京都）
16日 青山善光寺訪問（港区）
18日 第10回理事会（天王寺）
19日 第98回文化講座
総会打合せ（浅草・本山東本願寺）
24日 （公財）国際仏教興隆協会再生活性化委員会出席（目黒）
30日 （公財）国際仏教興隆協会第15回理事会出席（明照会館）
31日 （公財）全国青少年教化協議会平成28年度第1回理事会・第40回正力松太郎賞授賞式出席（東京グランドホテル）

6月 June

14日 東京都仏教連合会研修会・懇親会出席（品川プリンスホテル）
16日 （公財）国際仏教興隆協会評議員会出席（明照会館）
17日 （公財）国際仏教興隆協会理事会出席（明照会館）
22日 第99回文化講座（京都貴船神社・大津三井寺）
27日 （公財）日本宗教連盟評議員会出席（増上寺会館）

事務局だより

常々、社会福祉事業に多くの方々よりご協力いただきありがとうございます。それぞれの活動に運用させていただきます。
どうぞ今後ともよろしくお願いいたします。（順不同・敬称略）

▼ご芳志を頂きました方々
鷹司誓玉　河原時子　末廣久美
篠田節子　本多端子　米田陽子
岩脇孝子　松井百合子　匿名

▼社会福祉事業にご協力の方々
天王寺　末廣久美　木南鈴子
佐々木公子　河原時子

▼花の種にご協力の方々
鷹司誓玉　木南鈴子

▼タオル運動にご協力の方々
武林　隆　長澤弘志

▼あおぞら奨学金にご協力の方々
鈴木トヨ子

▼誌代にご協力の方々
静岡県仏教婦人会　河原時子
岩脇孝子

▼その他
石塚雅子（官製はがき）

▼写経運動にご協力の方々

【曹洞宗千葉県宗務所婦人会】
松本寿枝　藤ヶ﨑きみ子　吉野弘子
椿　久恵　蜂須賀和子　名取亀代子
上野洋子　小倉みち子　朝日勝代
小倉淑子　朝日昌枝　香田永子
池田ヨシミ　秋葉早苗　梅澤絹子
石川須美子　渡邊良子　永嶋美恵子
小倉静江　三沢和子　伊藤喜代子
俊光　須賀眞佐子　片岡滋子
大塚昌子　深野まゆみ　田旗テル子
山中スミ子　菊池愛子　松本敦子
桂嶽　匿名

【新豊院】
海野菊枝　小久保民江　植松園子
望月みや子　花田まさ子　出雲君美子
花田照子　篠田節子

【貞善院仏教婦人会】
荒井教子　大石君世　増田若江
北原寿満子　杉本雅子　岩本節子
村松貞子　近藤好子　増田由起子
平山輝代　近藤鎮一　清水信子
矢野敬子　矢野登子　齊藤つた江
新村悦子　伊藤百々代　秋山和美
木南鈴子

【宝光院】
大橋百合子　金井佐久子　猪瀬三枝子
大橋勢　遠井悦子　浜野福貴子

【事務局】
髙橋ふみ子　村上和之　木村匡成
海老名初江　鈴木トヨ子　岩脇孝子

正力松太郎賞「第40回特別賞」受賞

小池美代子氏
（大本山須磨寺）

5月31日、正力松太郎賞の表彰式が行われました。
（公財）全国青少年教化協議会が、仏教精神に基づき青少年・幼児の健全な育成に貢献した個人・団体表彰し、文化・藝術などの秀でた活動を顕彰しています。
本年は一絃須磨琴保存会が「第40回特別賞」を受賞されました。
阪神淡路大震災のあと、保存会設立後、「兵庫・神戸復興讃歌」などの演奏活動を展開して被災者支援に務められ、わたくしたち連盟も須磨寺を会場に被災者支援のバザーを開催いたしました。以来私たちの活動にご賛助ご協力をいただいています。そのご縁で一絃琴をお聞きする機会がありました。
一絃琴は、平安初期に在原行平卿が、須磨の地に流されたとき、渚で拾った板切れに冠の緒を張って琴を作り、岸辺の葦の茎を爪にして、その琴を弾じたそうです。都を偲び、自らの寂寥を慰めたのが始まりと伝えられています。

←大会祝賀演奏
一絃須磨琴保存会の皆さま

あとがき

鷹司誓玉名誉会長ご退任の年に、文化講座は第100回を迎え記念講演会を開催致すことになりました。これまでの活動や、100回の開催内容を見ますと、時の流れと仏婦の歴史を感じます。
鷹司様には、ご退任後も連盟を末永く見守っていただきたく存じます。私どもも、ご指導頂きました数々のことを胸に刻み、更に精進してまいりたいと存じます。

合掌

事務局長　小棹ふみ子

東日本大震災支援

2016年3月8日、全日本仏教婦人連盟が助成した東日本大震災追悼回向コンサート「海霧讃歎」が陸前高田で開催されました。この曲は津波で亡くなられた陸前高田の佐藤淳子さんが生前読まれた和歌「海霧に　とけて我が身も　ただよはむ　川面をのぼり　大地をつつみ」を祈りの言葉とし、弔いの音楽として新たに作曲された聲明曲です。作曲家・宮内康乃氏と和歌作者のご子息である阿藤慧・晃氏兄弟との出会いにより生まれました。
震災から5年目となる今年、この「海霧讃歎」を和歌が生まれた陸前高田の地にて、天台・真言宗の僧侶たちの聲を通して、大地に、海に、空に、人々の心に届けることができたらという作曲当時からの宮内氏の願いによりこのコンサートを企画したそうです。当連盟も鎮魂の祈りを込めてコンサートの助成に協力させていただきました。